宮ノ越貝塚が分布する。山野貝塚は後期前葉から晩期にかけて継続する集落で、周辺には山野貝塚に先行する後期初頭の集落である伊丹山遺跡や縄文時代全般の遺物が出土する角山遺跡が所在している。一方、宮ノ越貝塚の周辺には堀之内１式期の住居が検出された西ノ窪遺跡や同じく堀之内式期の土坑が検出された境№２遺跡や境遺跡が所在する。このように山野貝塚周辺は縄文時代後期の遺跡が密に分布する地域となる。

ここで、山野貝塚と宮ノ越貝塚から出土する貝類を比較してみると、第４章で詳述するが、山野貝塚はほぼすべて海産性の貝類となるのに対し、宮ノ越貝塚は、表採資料ながら十数点の汽水産のヤマトシジミが含まれる。このことは、山野貝塚がより海産資源に特化していたことを反映している可能性も考えられ、その立地を考え合わせると、遺跡北側の境川の支流を下って、直接海に出ていたのに対して、宮ノ越貝塚は小櫃川の低地～河口域を経由して海に出ていたとする解釈も可能である。このように山野貝塚と宮ノ越貝塚は、近隣の同時代の貝塚でありながら、その立地条件を反映して、海産資源獲得に向かう方向が異なっていた可能性も考えられるが、この問題については宮ノ越貝塚の実態解明を含め今後の課題である。

第２節　周辺の遺跡

次に、貝塚の分布がややまばらとなってくる内湾東岸南部の縄文時代後・晩期の遺跡分布について、貝塚以外の遺跡も含めて概観する（第５図）。養老川下流域右岸には、祇園原貝塚（２）、西広貝塚（３）、山倉貝塚（４）、山倉天王貝塚（５）の大型貝塚が密に分布しており、祇園原貝塚、西広貝塚については精緻な分析が行われている。特に西広貝塚は貝塚のほぼ全体を調査し、かつ整理作業においても膨大な自然遺物を分析しており、当地域の縄文時代後・晩期を考える上で重要な資料を提供している。養老川と小櫃川の間に位置するいわゆる袖ヶ浦台地では、養老川左岸の中～下流域に鬼子母神貝塚（６）、諸久蔵貝塚（７）、瓜ヶ岱貝塚（８）の馬蹄形貝塚が分布する。中流域の上高根貝塚（11）は大規模な点列状を呈する貝塚で、現在の海岸線からは９㎞ほど内陸に位置するものの海産資源を豊富に含む。椎津川上流域には山見塚遺跡（９）、瀬戸崎遺跡（10）が分布する。詳細は不明ながら、諸久蔵貝塚は中期から晩期まで継続する貝塚と考えられ、他は後期を中心とする貝塚のようである。瀬戸崎遺跡と上高根貝塚は、山野貝塚の北方で最も近接する大型貝塚となる。

山野貝塚周辺の遺跡については前節で述べたが、再度触れておく。山野貝塚と浅い谷を隔てて隣接する伊丹山遺跡（12）では後期初頭称名寺式期～前葉堀之内式期の住居が３軒検出されており、山野貝塚に先行する集落と位置づけられる。伊丹山遺跡の南側に隣接する角山遺跡（13）では遺構は検出されないものの、縄文時代全般の遺物が出土している。また、山野貝塚の南方１㎞には中期～後期にかけての馬蹄形貝塚とされる宮ノ越貝塚（15）と、堀之内式期の遺構が検出された西ノ窪遺跡（14）、境№２遺跡（16）、境遺跡（17）が所在し、小櫃川右岸において、当該期の遺跡が密集する地域となる。

小櫃川を挟んだ対岸の木更津台地には、比較的多くの貝塚が所在する。祇園貝塚（19）は、南北約 140 ｍ、東西 110 ｍの範囲に環状または馬蹄形に展開する山野貝塚に勝るとも劣らない大型貝塚で、中期～後期にかけて貝塚が形成されたと考えられている。出土土器は早期中葉～後期末葉までの長期に及ぶが、加曽利Ｅ式～安行式が主体となる。特筆すべき土器として、近畿から中国地方を中心に分布する中期前半の船元Ⅱ式土器が出土している。また、土偶は、後期の山形土偶、ミミズク土偶の他晩期の土偶も出土している。骨角歯牙貝製品も豊富で、釣針、銛、ヤス状刺突具などの漁撈具の他、垂飾、貝輪などの装飾品も出土している。動物遺体は、貝類はイボキサゴ主体でハマグリが準じるという内湾東岸と同様な様相を呈する。魚類も豊

富に検出されているが、1969（昭和 24）年の調査ではマダイよりもクロダイが多く検出されたようである。このように祇園貝塚は多種多量の遺物を包含し、関西方面からの遺物がもたらされるなど、小櫃川左岸の拠点集落であり、小櫃川を挟んで所在する山野貝塚とは同時期に営まれていた集落として興味深い関係にあるが、十分な調査が実施されずに破壊されてしまった。祇園貝塚の北西近隣の砂堆上には永井作貝塚（18）が所在する。低地の貝塚で、銛頭、釣針などの漁撈具が出土している。矢那川中下流域に所在する峰ノ台貝塚(21)は、山野貝塚と同様に千葉県主要貝塚として調査が実施された。後期前葉を主体とする貝塚で、内湾東岸の貝塚と同様の貝類、魚類組成を示すようである。魚類ではフグが特徴的に検出されており、同じくフグが比較的多く検出されている山野貝塚と類似する。烏田川下流域の葭ヶ作貝塚（大久保貝塚）（20）は舌状台地の先端部に３地点の貝塚が弧状に巡る貝塚で、出土遺物から、堀之内式期から安行１式期まで継続的に営まれたと考えられる。なお、1950（昭和 25）年に山野貝塚の調査も実施したアメリカ進駐軍の将校であるマッコード氏によって調査が行われている。三直貝塚（28）は畑沢川と小糸川の分水嶺に立地する南北約 140 m、東西約 100 mの範囲に展開する「環状盛土」を有する集落である。中期後葉から晩期中葉までの住居が検出されており、それらは時期が新しくなるにつれて集落の外側から内側に遷地する傾向にある。また、遺跡の北側及び西側から貝層が検出されており、イボキサゴ主体で、ハマグリ、シオフキが付随するという、内湾東岸の貝塚群と同じ貝類組成を示す。また、魚類組成に占めるマダイの割合が高く、魚類組成から見ると外湾的な要素を有する集落といえる。小糸川を挟んだ対岸の鹿島台遺跡（29）は中期～後期にかけての集落で、加曽利Ｂ式期の大型住居が検出されている。

これまで見てきたように、山野貝塚と小櫃川を挟んだ南側対岸の木更津台地の西側には、貝塚を伴う遺跡が比較的多く分布している。一方、木更津台地の東側では、貝塚の規模の大小はあるが、小櫃川の中流域に大規模な集落が分布し、さらに最上流に大規模な集落が集中する。

小櫃川中流域の支流である鑓水川水系には嘉登遺跡（23）、向神納里遺跡（24）、上宮田台遺跡（25）が所在する。嘉登遺跡は中期末葉～後期前葉に限定される集落で、向神納里遺跡は中、後期、上宮田台遺跡は中期末～晩期中葉まで継続的に営まれる拠点的な集落である。さらに、水系は異なるが上宮田台遺跡の西方２㎞には後期前葉～中葉の列状貝塚を有する伊豆島貝塚（22）が所在する。これらの遺跡から小櫃川をさらに遡った小櫃川河岸の微高地に所在する土器崎遺跡（26）からは縄文時代晩期の漆塗りの櫛が発見された。さらに戸崎城山遺跡からは加曽利Ｂ、安行１式期の土器が出土する。

小櫃川最上流域には寺ノ代遺跡（31）、坂畑南遺跡（32）、豊田遺跡（33）が近距離に集中する。寺ノ代遺跡は後期前葉～後半の集落で、西関東系の土器が出土している他、石錘が 145 点も出土しており注目される。豊田遺跡は調査成果が報告されていないものの、中期～後期主体の大規模な集落となる。坂畑南遺跡は確認調査のみであるが前期～晩期終末までの住居が確認されている。

第３節　調査の歴史

１　山野貝塚の名称

袖ケ浦市内には 11 箇所の貝塚が現存し、山野貝塚の周辺に７箇所の貝塚の存在が知られているが、明確な所在位置や貝塚の内容を把握できているものは少ない。

市内の貝塚で学界における初出は、飯富貝塚である。飯富貝塚は 1920（大正９）年頃に横山將三郎氏が

小櫃川流域に所在する踏査した遺跡の一つで、根形村（現袖ケ浦市）飯富台に所在し、縄文土器、土偶、打製石斧、石皿を採集した貝塚として報告された（横山 1931）。それ以前にも、飯富で確認された縄文土器の包蔵地について紹介されているが、貝塚を示しているものかは不明である（東京帝国大学 1917）。

次に、酒詰仲男氏は 1938（昭和 13）年に大場磐雄氏らとともにこの地に訪れた際に、飯富貝塚の発掘調査を実施したことが明らかとなっており、堀之内式土器のほか加曽利Ｅ式土器、石剣片、石斧などが出土したとされている（大場 1977）。当時の記録によると「全くナマコ状に高くなり、之と貝層の分布関係にあるものの如く、大なる貝塚なり」と記述され、約 1.5 ㎡程度の発掘調査ではあったが、キサゴを主体とした 25 ㎝程の純貝層と貝層下の 35 ㎝程の土層を確認している（酒詰 2008）。また、獣骨なども出土したようであるが、同氏は 1961（昭和 36）年に刊行した『日本縄文石器時代食料総説』の飯富貝塚欄で、獣骨はイノシシ、シカに種別同定されている。なお、理由は不明であるが、貝類の記載の中では発掘時に確認した貝層の主体をなすキサゴが標記されていない。

このように、昭和初期には飯富貝塚において発掘調査が行われたことが明らかとなっているが、飯富貝塚が所在するとされる地点では近年に実施された分布調査等でも貝塚があったという証拠は確認されていないことから、飯富貝塚と山野貝塚が同一の貝塚である可能性が高いと考えられている（光江・井上 2004 他）。古老の地元住民は山野貝塚周辺を「飯富山野（いいとみざんや）」とも撥音しているように、山野貝塚の地名を飯富として誤認した結果かもしれない。

山野貝塚の名称を文献上初めて確認できるのは、1967（昭和 42）年に文化財保護委員会により発行された全国的な遺跡分布図『全国遺跡地図（千葉県）』である。その分布図において、山野貝塚として初めて地図上に示されたが、飯富貝塚も別地点に記されており、周辺にも他３箇所の貝塚が存在していることとされている。山野貝塚以外の貝塚については、既に刊行されていた酒詰仲男著『日本貝塚地名表』や千葉県教育委員会刊行『千葉県石器時代遺跡地名表』を転載したものと判断できるが、山野貝塚の初出した理由は現時点では不明である。遺跡分布図刊行に伴う現地踏査が行われ、貝塚が把握されたかもしれない。

ここで、1938（昭和 13）年の酒詰氏による調査以降の飯富貝塚や山野貝塚について確認してみると、戦後の 1950（昭和 25）年に飯富に所在する貝塚の発掘調査が知られている（光江・井上 2004 他）。駐留軍人のマッコード氏による発掘調査で、わずか 2.25 ㎡程の小規模な調査ではあったが、厚さ約 36 ㎝の貝層を確認したことや貝塚内に７箇所の貝塚が存在していること、貝塚周辺に他の貝塚があることを指摘している。この発掘調査により完形土器２点を含む堀之内式期の土器片のほか、磨製石斧や弥生時代もしくは土師器の高坏、平安時代と思われる甕が出土し、これらの遺物についてはアメリカ国立スミソニアン自然史博物館に所蔵されている。マッコード氏の手記や報告によると発掘場所の地名を「山野貝塚台地（Samya Shell Field）」と標記しており、その発掘地については現在の山野貝塚であると考えられる。

酒詰仲男氏により 1959（昭和 34）年にまとめられた『日本貝塚地名表』の飯富貝塚は、異名として台貝塚とも記載され、堀之内・加曽利Ｂ・安行式期のほか加曽利Ｅ式の編年時期が示されている。なお、所在位置については、飯富神社北裏の大字飯富字台に所在するとされているが、小字「台」は現在存在していない。神社北西側に「台中」の小字が窺えるが、「台中」は大字が異なるので、『日本貝塚地名表』に記された貝塚の位置については不明と言わざるを得ない。また、同年に千葉県教育委員会より刊行された『千葉県石器時代遺跡地名表－県下の石器時代遺蹟の分布とその文化－』でも飯富貝塚の標記が認められ、時期などが記載されるが、これらの 1954（昭和 34）年に刊行された二つの文献には、山野貝塚の記載は認められない。

これまであまり着目されていなかったが、1963（昭和 38）年には飯富に所在する貝塚から人骨が出土したことが知られている。すなわち、飯富に所在する貝塚から大黒毅三氏により人骨が採集され、東京大学に持ち込まれたことが契機となり、翌年の 1964（昭和 39）年には、その出土地点を東京大学の遠藤萬里氏が発掘調査を実施し、伸展葬の人骨１体が発見されたことである。持ち込まれた人骨と調査により出土した人骨は現在でも東京大学総合博物館にその際の記録とともに保存されている。この遠藤氏の記録によると人骨が出土した貝塚は飯富貝塚とメモ書きされており、出土地点の地番や周辺の概要説明のほか、５万分の１地形図に貝塚と人骨出土位置について記した記録も残されている。地番については、現在の地番との整合性はなく、誤記の可能性があり、地番の特定は難しい。ただし、メモ書きされた周辺概要を検討した結果や位置を示した地形図、人骨発見者への聞き取り調査から、人骨は山野貝塚から出土したことは明らかで、人骨の発掘調査時点には山野貝塚を飯富貝塚と認識していたことがわかる。山野貝塚の数少ない埋葬骨としてとても重要な資料と言える。さらに、最近になり畑耕作中に採集されたヒトの大腿骨は東京大学の調査地点の南西側から出土したと推定されており、いずれも山野貝塚内の墓域を考究する上で貴重な発見である。

前述したように、1967（昭和 42）年３月に刊行された『全国遺跡地図（千葉県）』には、飯富貝塚と山野貝塚は別地点に記載され、それぞれ別個の貝塚として認識され、所在地の小字に誤りが認められるが山野貝塚が初めて周知されることとなる。その３年後に千葉県教育委員会から刊行された『千葉県記念物所在地図史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』にも両貝塚が示されているが、既に刊行されている『全国遺跡地図（千葉県）』から情報を引き継いでいるものと判断できる。

そして、1973（昭和 48）年の送電線鉄塔建設に伴う山野貝塚の発掘調査へと至る訳であるが、その報告書においては山野貝塚と飯富塚貝塚として示されている。この飯富塚貝塚の名称についてもその理由は明らかでないが、「飯富貝塚」を「飯富塚貝塚」と表記した誤植であった可能性も考えられる。

このように、飯富の貝塚は大正年間から知られているものの、所在地や名称等に混乱が生じている。すでに記したように、現在のところ飯富貝塚と山野貝塚が同一の貝塚である可能性が指摘されている。少なくとも東京大学の遠藤氏の人骨を発掘した時点では山野貝塚を飯富貝塚と認識していたことは明らかであるが、大正期・昭和初期の諸報告には山野貝塚で主体時期とならない加曽利Ｅ式土器が出土していたり、所在場所の小字名が異なっていたりするため、別個に飯富貝塚が存在している可能性も否定できない。最近に至り、『日本貝塚地名表』に飯富貝塚の所在地として記載される飯富神社、すなわち飽富神社参道の切り通しにサルボウやアサリといった貝殻が台地上から転落した状態で発見されている。台地上で貝塚や土器を確認していないため、縄文期のものか断定できないが、地点貝塚等が存在している可能性もあり、飯富貝塚に関連する資料かもしれない。今後の詳細な分布調査等により明らかになるものと思われる。

２　調査の沿革

大正期～戦後直後

大正期には横山將三郎による踏査、1931（昭和６）年にその報告が行われ、学界等に貝塚の内容が公にされた。そして、戦前の 1938（昭和 13）年には酒詰仲男氏による発掘調査が実施され、1959（昭和 34）年の『日本貝塚地名表』に記された。いずれも飯富貝塚として報告されているが、飯富貝塚の実態については不明なところが多く、現在は山野貝塚と同一の貝塚の可能性が指摘されている（光江・井上　2004 他）。

そして、戦後に至りアメリカ進駐軍将校のマッコード氏により山野貝塚の発掘調査が実施され、その成果

については前項に記載したとおりである。なお、このマッコード氏の調査は近年に至るまで知られておらず、新たに掘り起こされた新資料でもある（光江・井上　2004）。

山野貝塚第１次調査（送変電線鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財調査）

1973（昭和 48）年に送変電線鉄塔建設に伴い山野貝塚の初の本格的な調査が行われた。調査面積は約 500 ㎡と限られた範囲であったが、直径約 120 ｍの馬蹄形を呈すると想定された（当時）貝塚の貝層北東部の調査を行った。

調査の結果、ソフトローム層直上の黒色土層上に遺物包含層や貝層を確認し、遺物包含層からは堀之内式～晩期安行式の土器、貝層からは主に堀之内式土器が出土した。遺構は、堀之内式期と見られる土坑が１基確認されたのみであるが、焼土や灰層も数箇所で確認されていることから、遺物包含層中に住居などの遺構があった可能性も指摘できる。なお、調査区北側の耕作土下にはローム質黄褐色土が認められ、当時の認識にはなかったと思われるが、いわゆる盛土遺構の可能性もある。出土遺物としては、堀之内式期～晩期安行式期にかけて多量の土器が出土しているが、中でも橿原式文様を有する関西系土器が注目される。また、土偶を含む土製品、石剣・石棒・独鈷石、石皿等の石器や骨角器も出土しており、１点のみであるがオオツタノハ製の貝輪の出土は着目されよう。

山野貝塚において初の本格的な発掘調査として位置付け、第１次調査として呼称している。

伊丹山遺跡調査（配水池建設に伴う埋蔵文化財調査）

伊丹山遺跡は山野貝塚の北東約 200 ｍに位置し、山野貝塚とは浅い谷により隔てられている。配水池建設に伴う調査として、昭和 53 年度に伊丹山遺跡発掘調査団により 5,599 ㎡の発掘調査が実施された。

調査の結果、住居３軒が発見され、そのうちの１軒からは称名寺式土器の埋甕が埋設されていた。また、ほぼ同時期と見られる小竪穴からはシオフキ・アサリ・キサゴ等の貝層が検出されており、山野貝塚の貝類と同様の組成傾向にあるが、他に貝層は確認できないことから食料獲得に関する生産活動の相違が窺える。出土遺物は縄文時代中期終末期～後期後半までの土器が出土しているが、称名寺式と堀之内１式が大半を占め、堀之内式期以降に盛行期となる山野貝塚より集落の時期が古く位置付けられ、浅い谷を隔て隣接する遺跡の関係が着目できる。

角山遺跡調査（配水タンク建設に伴う埋蔵文化財調査）

角山遺跡は山野貝塚の北東約 300 ｍ、伊丹山遺跡の南東側約 200 ｍに位置する。発掘調査は昭和 53 年度に約 4,800 ㎡を対象として実施された。調査の結果、縄文時代の炉穴が発見されているが、後期の遺構はない。一方、遺物包含層からは多量の縄文土器が出土しているが、主体となるのは早期後半と後期である。特に後期については称名寺式・堀之内式・加曽利Ｂ式土器が出土し、晩期の安行３式も認められる。伊丹山遺跡と同様に後期前半を主体としている遺跡であると考えられるが、安行３式土器の出土など、やはり山野貝塚との関連も着目できる。

山野貝塚第２次調査（千葉県主要貝塚確認調査）

本調査は、千葉県内の重要遺跡の今後の保存・活用に向けた基礎資料を得ることを目的とし、県内の主要貝塚の一つとして平成４年度に 200 ㎡の確認調査を千葉県教育委員会が実施した。

まず、発掘調査前の詳細なボーリング調査により、概ね 140 ～ 110 ｍの範囲に展開する馬蹄形（相弧状）の貝層であることが判明した。また、東西の貝層が途切れる範囲も認められるため、それぞれ大きさの異なる数ブロックの貝層で構成されることも明らかとなった。次に、第１次調査で確認できなかった居住域を把

握するため、ボーリング調査に基づき設定したトレンチ調査を行った。その結果、住居 12 軒、土坑 19 基が検出され、住居には柄鏡形住居も含まれる。これらの遺構の多くは堀之内式期に相当し、この時期の遺構が貝層外に展開する傾向にあることが判明した。また、遺物包含層も２箇所で確認されている。一つは東側貝層外側の境川水系の支谷に通じる緩斜面に形成された堀之内１式～安行２式期で、もう一箇所は相弧状貝層内側の窪地に形成された晩期前半を主体とするものである。

本調査を実施したことにより、貝層の範囲などの基礎資料を得ることができた。また、堀之内式期には貝層範囲外への遺構の展開が確認され、時期により相異があると思われるが、集落としてはより広範囲に広がることが認識された。

角山遺跡第２次調査・伊丹山遺跡第２次調査（山野貝塚範囲確認調査）

山野貝塚は第１・２次調査の成果によりその重要性が鑑みられ、2000（平成 12）年６月の袖ケ浦市指定史跡へ指定、2007（平成 19）年７月および 2009（平成 21）年１月追加指定、2009（平成 21）年３月の千葉県史跡指定を経て、貝塚の部分的な保護の措置が図られている。そのような中、山野貝塚の全体的な現状保存を図る必要性があることから、袖ケ浦市教育委員会では国史跡として保存を図ることを検討し、指定に向けて貝塚や遺跡の範囲確認調査及び詳細地形測量を平成 22 年度から文化庁国庫補助及び千葉県費補助を受けながら実施した。

平成 22 年度には、山野貝塚と近隣遺跡の関連性を確認するため、過去に調査されている角山遺跡と伊丹山遺跡の調査を改めて実施することとなった。この調査を第２次調査と呼称する。

角山遺跡第２次調査は、第１次調査の北側約 9,290 ㎡を対象として確認調査を実施したが、後期と思われる土器が若干出土したのみで着目すべき遺構は確認できなかった。

伊丹山遺跡第２次調査は、第１次調査の東側の北西－南東方向の細長い調査範囲とした。北西側の調査区は浅い支谷に面しているため傾斜しており、遺構・遺物等はほとんどなかったが、南東側は旧表土と思われる黒褐色土が遺存していた。16 トレンチではこの黒褐色土からその下層において後期土器が多量に出土した。土器は称名寺Ⅱ式～堀之内式期に比定できるもので、第１次調査とほぼ同じ成果を得ることができた。両遺跡の調査成果を踏まえると、伊丹山遺跡は山野貝塚に先行する集落の可能性があり、角山遺跡は同時期の活動痕跡が認められる遺跡と考えられる。

山野貝塚詳細地形測量

平成 23 年度に山野貝塚の現状を把握するためと今後の活用資料を得るために、馬蹄形に展開する貝層や周辺部約 47,000 ㎡の測量を実施した。その結果、貝層の高まりや中央窪地の状況、今まで情報が不足していた貝塚南側の地形の状況が明らかとなり、貝層の遺存状態が良好であることが確認された。

山野貝塚第３次調査（山野貝塚範囲確認調査）

平成 23 年度は貝塚の西側貝層の南西側の調査を行った。本調査が第３次調査となる。本調査は 6,673 ㎡を対象した確認調査で、23 箇所のトレンチを設定した。大部分が大きな攪乱を受けていたが、貝層に近い 16 トレンチでは後期の住居１軒を確認した。また、撹乱の中からも後期の土器が多数出土したことから、第２次調査で未確認であった西側貝層の周辺部にも集落が展開する可能性が高まった。

山野貝塚第４次調査（山野貝塚範囲確認調査）

平成 24 年度は貝塚貝層の北西側と南西側の２箇所で範囲確認調査を実施した。北西側の調査区は、２箇所のトレンチを設定したが、いずれも上部が削平を受けていたため、遺跡範囲を確認することができなかっ

た。南西側の調査区は南西側へ傾斜する台地縁辺部にあたる。調査の結果、縄文時代の遺構は確認できず、遺物の出土も少量に留まった。しかしながら、南西側隣接地から一定量の縄文土器が表面採集できることから、貝層南西側の台地縁辺部付近まで遺構が展開している可能性が考えられる。

南西部地点貝層現地確認

平成 25 年４月に第４次調査区の 20 m北東側の地権者よりゴミ穴から貝が見つかった旨の連絡を受け、現地確認を行ったところ、貝塚の貝と思われるアラムシロ・イボキサゴ・イボニシ・ツメタガイ・アサリ・シオフキを確認することができた。ボーリング調査を行ったところ、径約２ｍの不整円形の範囲に貝が堆積しているようで、これまで同地内において貝の出土は今回が初めてとのことであることから、遺構内貝層の可能性が高く、台地縁辺部まで遺構が展開する可能性が高まった。

表２　山野貝塚調査歴等

年　月　日	事　　項
1920（大正9）年頃	横山將三郎踏査 ・横山將三郎1931「上総国小櫃川流域に於ける石器時代遺跡に就いて」『史跡名勝天然紀念物』第6集第1号　千葉県
1938（昭和13）年 7月	酒詰仲男発掘 ・大場磐雄『樂石雑筆』 ・酒詰治男編2008「酒詰仲男 調査・日録　第１集　」『東京大学総合研究博物館標本資料報告　第72号』
1950（昭和25）年頃	マッコード氏発掘（2.25㎡） ・光江章・井上賢2004「ハワードＡ．マッコード（Howard A.MacCord）資料」『千葉県の歴史　資料編　考古４』 (財）千葉県史料研究財団
1963（昭和38）年 11月	大黒毅三遺物採集 ・東京大学総合研究博物館『縄文時代人骨３）　千葉県の遺跡（堀之内、加曽利、曽谷など）』
1964（昭和39）年頃	遠藤萬里（東京大学）発掘調査（約4㎡） ・東京大学総合研究博物館『縄文時代人骨３）　千葉県の遺跡（堀之内、加曽利、曽谷など）』
1973（昭和48）年 5月21日～7月9日	第１次調査（調査対象面積約900㎡） ・（財）千葉県都市公社1973『袖ヶ浦町山野貝塚　付木更津市下部多山供養塚』
1978（昭和53年） 4月24日～7月20日	伊丹山遺跡発掘調査（約5,599㎡） ・伊丹山遺跡発掘調査団・袖ヶ浦町水道事業1979『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』
1980（昭和55年） 2・3・6月6日～15日	角山遺跡発掘調査（約4,800㎡） ・君津広域水道企業団1980『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －角山遺跡・深城遺跡・飯富遺跡・苗見作遺跡－』
1992（平成4）年 10月1日～31日	第２次調査（約200㎡） ・（財）千葉県文化財センター1993『袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書』
2000（平成12）年 6月28日	袖ケ浦市指定文化財指定
2008（平成19）年 7月6日	袖ケ浦市指定文化財追加指定
2009（平成21）年 1月28日	袖ケ浦市指定文化財追加指定
2009（平成21）年 3月17日	千葉県指定史跡指定
2010（平成22）年 5月17日～28日	範囲確認調査（角山遺跡第2次調査・伊丹山遺跡第2次調査） ・袖ケ浦市教育委員会2011『平成22年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』
2012（平成24）年 1月	詳細地形測量
2012（平成24）年 1月18日～30日	第３次調査（95.4/6,673㎡） ・袖ケ浦市教育委員会2012『平成23年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』
2012（平成24）年 ７月17日～30日	第４次調査（30/1,685㎡） ・袖ケ浦市教育委員会2013『平成24年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』
2013（平成25）年 1月28日～2月8日	第５次調査（18.7/179㎡） ・袖ケ浦市教育委員会2013『平成24年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』
2013（平成25）年 4月9日	南西部貝層現地確認
2014（平成26）年 2月10日～21日	第６次調査（36/1,666㎡） ・袖ケ浦市教育委員会2014『平成25年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』
2014（平成26）年 12月15日～25日	第７次調査（14/1,553㎡） ・袖ケ浦市教育委員会2015『平成26年度　千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』

山野貝塚第５次調査（山野貝塚範囲確認調査）

第４次調査で確定できなかった貝塚北西側の範囲確認調査を地点を変えて実施した。調査地点は北貝層に近接するところにトレンチを設定した。耕作土や撹乱から多量の縄文時代の遺物が出土したが、わずかに残存した黒色土中からは遺物がほとんど出土しなかった。出土遺物の大部分は過去の調査であまり出土していない加曽利Ｂ式土器であることから、本調査区付近にこの時期の遺構が展開していたか、もしくは遺跡内の他の箇所から持ち込まれた土によって埋め戻された可能性がある。本調査区の近接地で採集された土器の大部分は堀之内式期の土器であることから、客土の可能性が高いと考える。

山野貝塚第６次調査（山野貝塚範囲確認調査）

第６次調査は、貝層の北側から北東側へ傾斜する斜面部の調査で、トレンチを傾斜方向と平行に６箇所設定した。遺構や遺物包含層は確認できなかったが、堀之内式と加曽利Ｂ式土器が若干出土した。

本調査の結果から、貝層北側から北東側斜面部への遺構の展開は薄いと考えることができる。

山野貝塚第７次調査（山野貝塚範囲確認調査）

第７次調査は、学術的価値を明らかにするための資料の蓄積を目的とし、第２次調査で調査した貝層の再確認と貝層断面の剥ぎ取りを行い、今後の調査研究や活用に向けた資料にすることと、馬蹄形貝塚の中央窪地の土層断面を確認するため、同じく第２次調査のトレンチの再発掘を実施することとした。

貝層の確認については、第２次調査 10 トレンチを再発掘し、貝層を確認することができ、貝層の剥ぎ取りも行うことができた。また、貝サンプルの採取も行い、過去の調査サンプルと比較することにより、時期による貝層形成が確認できる可能性も考えられた。そして、中央窪地の 12 トレンチ再調査については、土層を確認したところ、立川ローム最上層であるⅢ層が欠如していることが明らかとなった。１箇所のトレンチでしか確認していないものの、中央窪地の形成要因である可能性も考えられた。昭和 48 年の第１次調査で確認したローム質黄褐色土はいわゆる盛土遺構の可能性もあり、これまでその配給元が不明であったが、中央窪地のローム土であった可能性も新たに考えられる成果を得た。

第４節　遺跡の概要

山野貝塚の特徴は、①遺跡全体の遺存状況が良好、②房総半島に現存する大型貝塚の中で最南部に位置する、③出土遺物の内容が豊富で、特に魚類の組成から東京湾の内湾部と外湾部（湾口部）の貝塚の中間的な様相を呈する、という３点が挙げられる。

①に関しては、過去の航空写真を見ると、馬蹄形に展開する貝層が肉眼でも確認できることから明らかである（図版２）。また、現在現地に赴くと、貝塚の広がりと中央窪地との高低差を実感することができる。

②に関しては、第２次調査時のボーリング調査より、馬蹄形に展開する主要な貝層は、東西 140 m、南北 110 mの範囲に堆積しており、貝の散布範囲は、東西、南北ともに約 150 mの範囲に及ぶことが分かっている。『千葉県の歴史　考古１　資料編』を元に縄文時代中・後・晩期の環状あるいは馬蹄形を呈する貝塚の大きさを比較したのが表３である。山野貝塚はその中では中位の規模の貝層を有する遺跡であることがわかる。ただし、地域別で見た場合、千葉県の南部には山野貝塚と木更津市祇園貝塚、君津市三直貝塚しか存在していないため、三直貝塚の大部分と祇園貝塚が消滅してしまった現在、山野貝塚は房総半島に現存する大型貝塚の中で最南部に位置する貝塚となる。

③に関しては本報告書の中で明らかにしていく内容であるが、魚類組成のみならず漁撈具の面からも山野

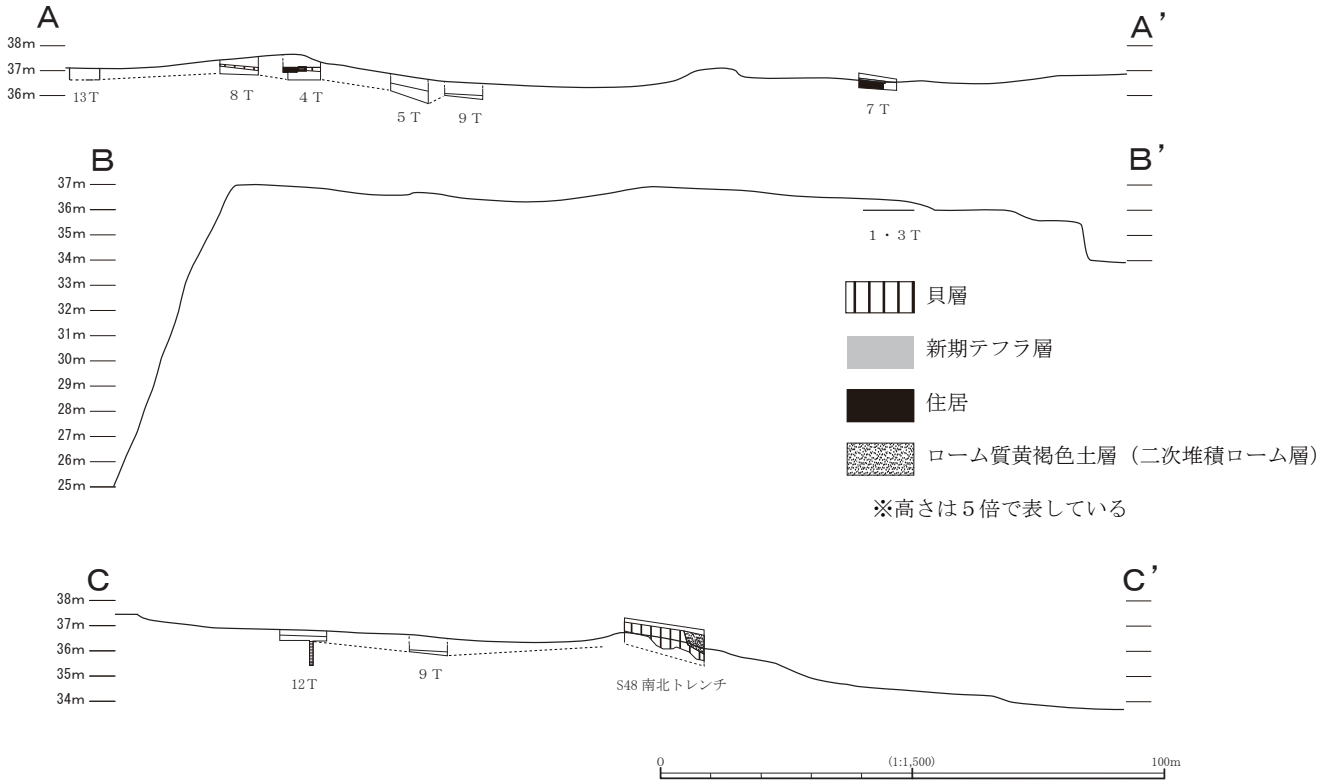
表３　千葉県に所在する縄文時代中・後・晩期貝塚の規模

名　　称	所在 市町村	指定 区分	時期	貝塚の形態	貝層の規模 （m）	貝層範囲 最大長（m）
曽谷貝塚	市川市	国	後期	馬蹄形	東西約210×南北約240	240
堀之内貝塚	市川市	国	後～晩期	馬蹄形	東西約225×南北約120	225
月ノ木貝塚	千葉市	国	中期	馬蹄形	東西150×南北200	200
長谷部貝塚	千葉市	県	中期	馬蹄形	200×150	200
佐山貝塚	八千代市		後期	馬蹄形	東西約140×南北約200	200
白井大宮台貝塚	香取市		中期	斜面	東西145×南北190	190
犢橋貝塚	千葉市	国	後期	馬蹄形	長軸約180×短軸約170	180
加曽利南貝塚	千葉市	国	後期	馬蹄形	直径約170	170
上新宿貝塚	流山市		後期	馬蹄形	南北170×東西120	170
阿玉台貝塚	香取市	国	中期	点列	160×110	160
荒屋敷貝塚	千葉市	国	中期	馬蹄形	東西約160×南北約150	150
今島田貝塚	市川市		中期	点列馬蹄形	東西110×南北150	150
野田貝塚	野田市	県	後期	馬蹄形	直径約150	150
東金野井貝塚	野田市		後期	馬蹄形	東西100×南北150	150
三輪野山貝塚	流山市		後～晩期	馬蹄形	東西150×南北120	150
山武姥山貝塚	横芝光町		中～晩期	馬蹄形	東西約100×南北約150	150
西広貝塚	市原市		中～晩期	馬蹄形	直径約150	150
荒海貝塚	成田市		晩期	環状	直径約150	150
花輪貝塚	千葉市	国	後期	環状	東西100×南北140	140
有吉南貝塚	千葉市		中期	馬蹄形	140×130	140
六通貝塚	千葉市		後～晩期	馬蹄形	東西140×南北125	140
余山貝塚	銚子市	市	後～晩期	馬蹄形か？	東西約140×南北約75	140
祇園貝塚	木更津市		中期後半～晩期初頭	馬蹄形	東西140×南北110以上	140
山野貝塚	袖ケ浦市	県	後期	馬蹄形	東西140×南北110	140
三直貝塚	君津市		中～晩期	点列環状	東西100×南北140	140
園生貝塚	千葉市		後期	馬蹄形	東西110×南北135	135
加曽利北貝塚	千葉市		中期	環状	直径約130	130
東寺山貝塚	千葉市	県	中期	馬蹄形（相弧状）	直径約130	130
姥山貝塚	市川市	国	中期	馬蹄形	東西130×南北120	130
子和清水貝塚	松戸市		中期	点列環状	130×100	130
山崎貝塚	野田市	国	後期	馬蹄形	直径約130	130
中沢貝塚	鎌ヶ谷市		後期	馬蹄形	長軸約130×短軸約85	130
滑橋貝塚	千葉市	県	中期	点列環状	直径約120	120
有吉北貝塚	千葉市		中期	点列環状貝塚	120×70	120
木戸作貝塚	千葉市		後期	馬蹄形	東西約120×南北約100	120
築地台貝塚	千葉市		後～晩期	馬蹄形	東西109×南北110	110
山倉貝塚	市原市		中期	環状	直径約110	110
蕨立貝塚	千葉市		中期	点列環状	径約100	100
誉田高田貝塚	千葉市		後期	馬蹄形	約100	100
奉免貝塚	市川市		後期	弧状	東西約30×南北約100	100
紙敷貝塚	松戸市		中期	馬蹄形	東西80×南北100	100
中峠貝塚	松戸市		中期	環状	100×90	100
一の谷西貝塚	松戸市		後期	馬蹄形	直径約100	100
高根木戸貝塚	船橋市		中期	環状・馬蹄形	100	100
草刈貝塚	市原市		中期	環状	100×70	100
小金沢貝塚	千葉市		後期	環状	直径約90	90
三郎作貝塚	香取市	市	中期	斜面	直線距離90	90
貝の花貝塚	松戸市		中～晩期	馬蹄形	直径約87	87
藤崎堀込貝塚	習志野市	県	後期	馬蹄形	東西60×南北80.5	81
野呂山田貝塚	千葉市		後期	地点	直径80	80

第６図　山野貝塚周辺地形図

Y=14500
Y=14600
Y=14700
X=-63200
X=-63300
X=-63400
X=-63500
1T
2T
3T
4T
5T
7T
8T
9T
10T
11T
12T
13T
14T
15T
16T
17T
18T
19T
20T
21T
22T
23T
24T
25T
26T
27T
28T
29T～32T
33T
34T
35T
36T
37T
38T
A
A'
B
B'
C
C'
南西部地点貝層
0
(1:1,500)
100m
貝層堆積範囲
貝層散布範囲
第１次調査（Ｓ48）
第２次調査（Ｈ４）
第３次調査（H23）
第４・５次調査（H24）
第６次調査（H25）
第７次調査（H26）
※10・12Ｔの白抜き部分

第７図　山野貝塚全体図



第８図　山野貝塚断面図

貝塚が外湾部的な要素を有する遺跡であることがわかる。

次に、山野貝塚の内容について概観していく。山野貝塚は縄文時代後期～晩期にかけての長期にわたり継続して営まれる集落である。集落の萌芽は後期前葉堀之内１式期であり、その初期段階から貝層が形成される。主要な貝層は大きく北、東、西に分かれるため、今後それぞれ北貝層、東貝層、西貝層と呼称する（第６図）。北貝層は最も分布範囲が狭く、貝堆積範囲は東西約 20 m、南北約 10 mの範囲に点在し、貝の散布範囲は東西、南北ともに約 30 mとなる。調査が実施されていないので、貝層の詳細については不明である。東貝層の貝堆積範囲は東西約 90 m、南北約 60 mの範囲にやや北側に弧を描くように分布し、貝の散布範囲は東西約 110 m、南北約 90 mとなる。貝層の厚さは、第１次調査範囲の中央部では最大で約 1.3 mを測り、東側の最も薄い部分では 33 ㎝を測る。東端の第２次調査の 11 トレンチでは約 30 ㎝を測る。なお、１次調査範囲は北東側へ傾斜する緩斜面に位置しており、北東側の耕作土下では斜面を埋めるようにローム質黄褐色土が堆積している。西貝層の貝堆積範囲は東西約 30 m、南北約 80 mの範囲にやや西側に弧を描くように分布し、貝の散布範囲は東西約 60 m、南北約 100 mとなる。貝層の厚さは、第２次調査４Ｔで約 30 ㎝、10 トレンチで約 25 ㎝を測る。

第１次調査時の地表面の標高は約 36.0 ～ 37.4 mに対し、同じ箇所の現在の標高は 35.5 ～ 36.7 mであることから、第１次調査時から現在までの間に地表面以下が 50 ～ 70 ㎝削平されていることが理解される。第１次調査時の耕作土の厚さが約 25 ㎝であることから、これまでの耕作等により、貝層の破壊が進行している可能性が高く、早急な保存が望まれるところである。

主要貝層外の地点貝層は遺構内に形成された貝層であり、北貝層と東貝層に挟まれたＳＩ 01・02 内、７トレンチのＳＩ 06 内と西貝層南端から南西方向に 50 mほど離れた地点で確認されている。この貝層から西側へ約 20 mの地点でも貝の散布が確認されているため、地点貝層の分布はさらに広がる可能性もある。

東貝層と西貝層に囲まれた部分は窪地となっており、現在は市道によって分断されているが、本来は東西約 70 m、南北約 80 mの範囲が窪地となっていたと考えられる。最も低い部分の標高は 36.4 mを測り、西

貝層の最も標高が高い部分（標高 37.6 m）との高低差は 1.2 mを測る。

遺構は、貝層部分及び貝層の外側で住居が 13 軒、土坑が 21 基検出されている。住居は大部分が堀之内１式期で、貝層の外側に分布する傾向にある。１・３トレンチ拡張部で検出されたＳＩ 02 は柄鏡形住居で、少なくとも３回の建て替えが行われたと考えられる。７トレンチのＳＩ 06 からは五徳状に土器を並べおいた上に埋設した土器が出土した。４トレンチのＳＩ 08 のみが明確に加曽利Ｂ式期の住居となる。土坑は１・３トレンチ拡張部で多く検出されており、ＳＫ 01 からは横位の深鉢が出土されたことから墓坑と考えられる。

出土した遺物は人工遺物と自然遺物があるが、人工遺物は土器・土製品・石製品の他、多量の骨角歯牙貝製品が発見されている。出土した土器の分布状況をみると、貝層の外側から貝層部分においては後期前葉堀之内式期から後期中葉加曽利Ｂ式期が多くなるが、貝層の内側になると後・晩期安行式期が多くなり、当該期の窪地を有する遺跡と同様な傾向を示す。ただし、第１次調査が実施された北東部の緩斜面では、貝層の内側（南西側）から外側（北東側の斜面部）に向けて出土する土器が新しくなる傾向にあり、特に前述したローム質黄褐色土層からは晩期前葉の土器が多く出土する。自然遺物は貝類の他、多量の獣魚骨類が出土している。獣骨類はシカ・イノシシが主体となる。魚骨類はクロダイ・スズキの他、マダイの出土量が多く、東京湾の湾奥部と外湾部の貝塚で出土する魚類組成の中間的な様相を示す。

これらの内容から、山野貝塚は貝塚を伴なう中央窪地型集落で、遺跡の立地を反映して、東京湾東岸の湾奥部及び東岸北部に所在する遺跡と外湾部に所在する遺跡の魚類組成の中間的な様相を示す遺跡である。

参考文献

菊池利夫 1974『東京湾史』大日本図書株式会社

吉村光敏 1985「第一編　土地のすがたとそのなりたち」『袖ヶ浦町史』通史編上巻　袖ヶ浦町史編さん委員会

小杉正人 1989「完新世における東京湾の海岸線の変遷」『地理学評論　Ser.A』日本地理学会

貝塚爽平編 1993『東京湾の地形・地質と水』築地書館

（財）千葉県史料研究財団 1996『千葉県の自然誌　本編１　千葉県の自然』

工藤孝浩 1997「魚類」『東京湾の生物誌』築地書館

樋泉岳二・西野雅人 1999「第２節　縄文後期の都川・村田川流域貝塚群」『研究紀要』19（財）千葉県文化財センター

袖ケ浦市史編さん委員会 1999『袖ケ浦市史　自然・民俗編』

（財）千葉県史料研究財団 2000『千葉県の歴史　資料編　考古１』

西野雅人 2004「（１）貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古４』（財）千葉県史料研究財団

さいたま市立博物館 2006『第 18 回企画展　さいたまの縄文時代～まずは後晩期から～』

品川区立品川歴史館 2007『日本考古学は品川から始まったー大森貝塚と東京の貝塚ー』

（財）かながわ考古学財団 2010『掘り進められた神奈川の遺跡』

上守秀明 2011「袖ケ浦市山野貝塚についてー千葉県貝塚研究におけるその位置づけー」『袖ケ浦市史研究』15　袖ケ浦市郷土博物館

河野博編 2011『東京湾の魚類』平凡社

樋泉岳二 2013「動物資源利用からみた縄文後期における東京湾東岸の地域社会」『動物考古学』30　動物考古学会

村田六郎太 2013『加曽利貝塚』 同成社

文化庁文化財部記念物課 2013『埋蔵文化財関係統計資料』

樋泉岳二 2014「海洋資源の利用と縄文文化」『縄文の資源利用と社会』雄山閣

神奈川県教育委員会他『平成 27 年度かながわの遺跡展・巡回展　縄文の海　縄文の森』

※山野貝塚の発掘調査に関わる文献は表 2 を参照。